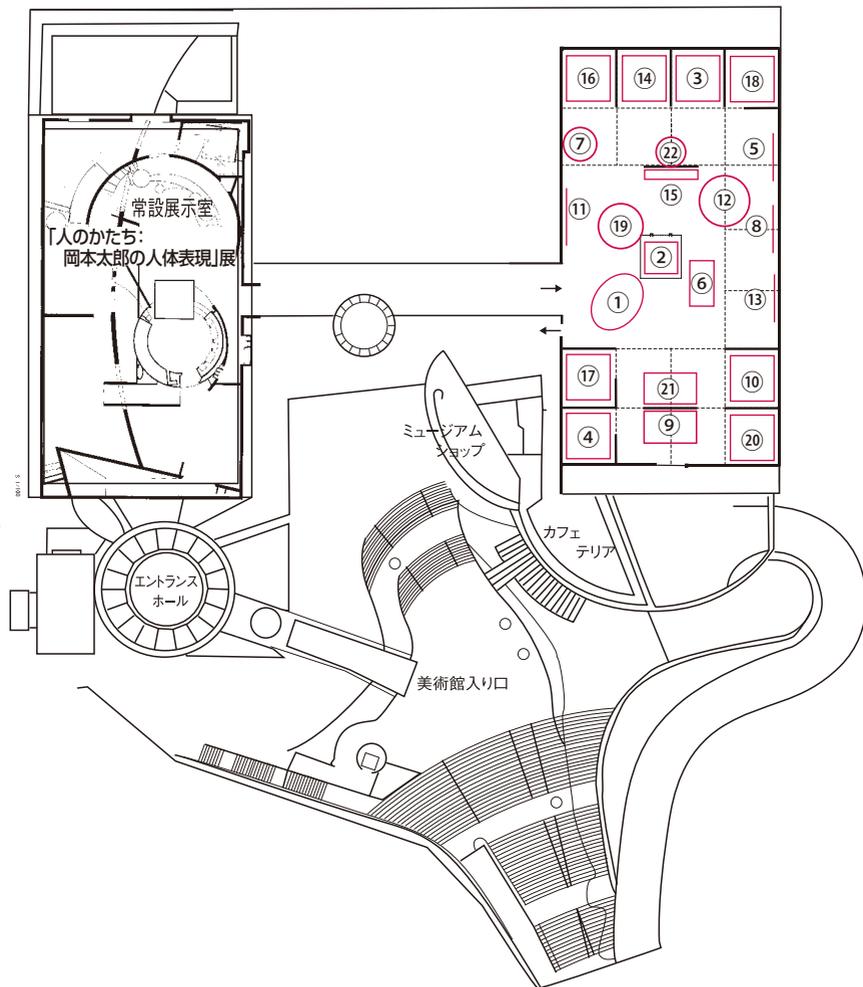


第27回
岡本太郎現代芸術賞展

The 27th Exhibition of
the Taro Okamoto Award
for Contemporary Art

TARO 賞

川崎市岡本太郎美術館
Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki



- ①つん／②三角 瞳／③池田 武史／④長 雪恵／⑤小山 恭史／⑥クレメンティン・ナット／
 ⑦月光社／⑧小山 久美子／⑨ZENG HUIRU／⑩タツルハタヤマ／⑪フロリアン・ガデン／
 ⑫村上 力／⑬大河原 健太／⑭遅四グランプリ実行委員会／⑮GORILLA PARK／⑯鈴木 のぞみ／
 ⑰野村 絵梨／⑱林 楷人／⑲村尾 かずこ／⑳横岑 竜之／㉑横山 豊蘭／㉒李 函樺

ごあいさつ

時代に先駆けて、たえず新たな挑戦を続けてきた岡本太郎。
 岡本太郎現代芸術賞は、岡本の精神を継承し、自由な視点と発想で、現代社会に鋭いメッセージを突きつける作家を顕彰するべく設立されました。
 今年で27回目を迎える本賞では、621点の応募があり、創造性あふれる22組の作家が入選を果たしました。21世紀における芸術の新しい可能性を探る、意欲的な作品をご覧ください。

2024年2月

公益財団法人 岡本太郎記念現代芸術振興財団
 川崎市岡本太郎美術館

Introduction

Taro Okamoto was an avant-garde artist who took on new challenges ceaselessly. The Taro Okamoto Award for Contemporary Art was established to honor artists who have inherited Taro's will to present sharp messages to society based on unfettered ideas and unique viewpoints.

The award, which is now in its 27th year, attracted 621 solicitations of artwork, and the prize was given to 22 artists. We hope that you enjoy the highly-motivated that explore the possibilities of fine art in the twenty-first century.

February 2024

Taro Okamoto Memorial Foundation for Contemporary Art
 Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki

入選作家 (50音順)

池田 武史 IKEDA Takeshi／大河原 健太 OKAWARA Kenta／長 雪恵 OSA Yukie
 遅四グランプリ実行委員会 OSO (Operation team of SLOW MINI 4WD GP Organization)
 小山 恭史 OYAMA Yasufumi／クレメンティン・ナット Clementine Nuttall
 月光社 Gekkosha／小山 久美子 KOYAMA Kumiko／GORILLA PARK
 鈴木 のぞみ SUZUKI Nozomi／ZENG HUIRU／タツルハタヤマ TATSURU HATAYAMA
 つん Tsun／野村 絵梨 NOMURA Eri／林 楷人 HAYASHI Kaito
 フロリアン・ガデン FLORIAN GADENNE／三角 瞳 MISUMI Hitomi
 村尾 かずこ MURAO Kazuko／村上 力 MURAKAMI Tsutomu
 横岑 竜之 YOKOMINE Tatsuyuki／横山 豊蘭 YOKOYAMA Houran／李 函樺 LI Hanxun

審査員 (50音順)

樫木 野衣：美術批評家／多摩美術大学教授
 土方 明司：川崎市岡本太郎美術館館長
 平野 曉臣：空間メディアプロデューサー／岡本太郎記念館館長
 山下 裕二：美術史家／明治学院大学教授
 和多利 浩一：ワタリウム美術館キュレーター

【凡例】 作家ごとに次のデータを掲載しました。
 氏名、作品名、作品サイズ(高さ×幅×奥行)cm、素材、作家の言葉、作家略歴など

1 岡本太郎賞

つん

Tsun

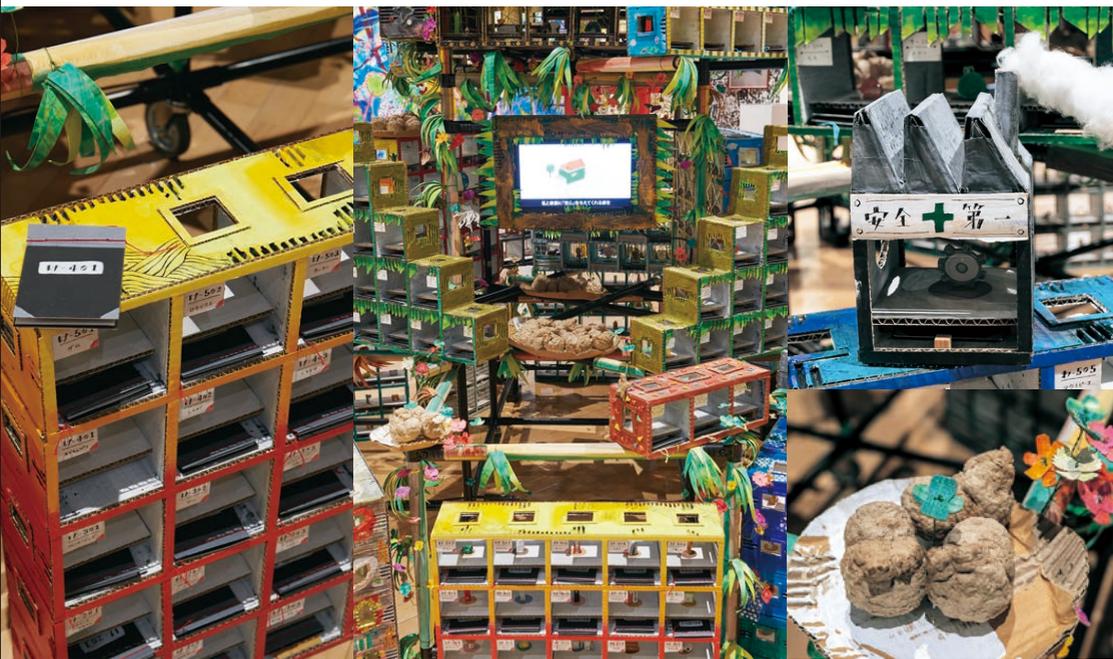
作品名	今日も「あなぐまち」で生きていく Today, I will continue to live in "Anagumachi"
作品サイズ	450×400×250cm
素材	段ボール、ジェッソ、アクリル絵の具、アクリル板、レジン、色鉛筆、防水剤、水彩用紙、木材、ボンド、プラ板、毛糸、折り紙、糸、コピー用紙、石膏粘土、ホッチキス、建築模型用パウダー、布、イレクターパイプ、メタルジョイント、モニター、澱粉糊、ワイヤー、フロールテープ、ボタン Corrugated cardboard, gesso, acrylic paint, acrylic board, resin, colored pencil, waterproofing agent, watercolor paper, wood, bond, plastic board, woolen yarn, origami, yarn, copy paper, stone modeling clay, stapler, architectural model powder, cloth, erector pipe, metal joint, monitor, starch glue, wire, floral tape, button

■ 作家の言葉

幼少期から自身の中に存在しているアニミズム的思考。人生の半分を過ぎた今もなお、生きていく上での核となっている。幼少期から積み上げ続けてきた、段ボールで出来た空想の町に住む住民たちは私の心を救い続けている。残された人生の時間の中で真っ白な団地にも色を加えられ、それらが空に到達する頃、私も天に還る。現代社会での利便性の象徴である段ボールはリサイクルされ、また生まれ変わるように、人間もまた輪廻転生を繰り返して生まれ変わる。制作で出た段ボールの切れっ端も私にとっては愛すべき「トモダチ」なのだ。団地も草花も赤ちゃんも、ほぼ全てのものが段ボールによって表現されている。

■ 略歴

1981年 福岡県北九州市生まれ
2004年 成安造形大学造形学部デザイン科卒業
[受賞]
2018年 「第29回熊本アートパレード」アートパレード大賞 + オーディエンス賞 受賞
[主な展示]
2008年 個展「あしたも お日さま でてこい でてこい 2008」(cifa-cafe/岡山)
2009年 個展「あしたも お日さま でてこい でてこい 2009」(cifa-cafe/岡山)
2015年 グループ展「유랑(流浪): Site Explorers」(Gallery 175 / 韓国)
2022年 個展「つんとあなぐまち展(前編)」(Mori no Ki/熊本)
2023年 個展「つんとあなぐまち展(後半)」(Mori no Ki/熊本)



【審査評】

「あなぐまち」とは、作者がずっとともに生きてきた「まち」の名前である。その意味で正しくは「作品」を超えたものかもしれない。しかし作者の手で作られたものであることも確かだ。作者が作った作品が、作品であることを超えて作者そのものになっていく。ここにはそう実感させるだけの現実味がある。多岐にわたる詳細な素材表記にも注目。(榎木野衣)



2 岡本敏子賞

三角 瞳

MISUMI Hitomi

作品名 *This is a life. This is our life.*

作品サイズ 400×400×400cm

素材 ポリエステル
Polyester

■作家の言葉

わたしたちは生まれながらに遺伝子に束ねられた存在である。普遍的で抗いようのないこれらを、布に絡みつく糸で表現する。与えられた設計図から成り立つこの体からは、いかなる生命体も抜け出すことができない。その残酷性を淡々と示すことで、生命について客観視してみたい。これが人生。これがわたしたちの人生。

■略歴

[略歴]

1988年 長野県生まれ

東京藝術大学大学院修了後、広告代理店勤務

[受賞]

2013年 東京藝術大学大学美術館 買い上げ賞
神戸ビエンナーレ 奨励賞

Art in the office CCC AWARDS 入選

2016年 第19回 岡本太郎現代芸術賞 入選

2017年 CANNES LIONS Shortlist

2018年 The One Show Merit



[審査評]

三角瞳は第19回太郎賞展に入選している。その時の作品は、無数のフィギュアによるインスタレーションであった。乱雑に積み重ねられたフィギュアの洪水が、現代社会における「個」の在り方を強い圧迫感をもって問う。今回は刺繍による作品。表は人物の顔、裏は遺伝子を表す赤い糸。単なる入れ物としての肉体を暗示する。薄い布切れに刺繍された無数の「個」が折り重なるように並べられる。表現内容と新鮮な手法、展示方法がうまくみ合い、説得力をもった作品となった。(土方明司)



3 特別賞

池田 武史

IKEDA Takeshi

作品名	Space X
作品サイズ	300×500×500cm
素材	紙、アクリル絵具、クレヨン、木製パネル、人形、ビデオ等 Paper, acrylic paints, crayons, wooden panels, dolls, videos, etc.

■作家の言葉

英、批評家・理論家のマーク・フィッシャーは、晩年、資本主義こそが、既に人間社会に存在している「人工知性=AI」であると言った。曰く、このプログラムは生活様式を規定し、均質化し、自己増殖以外の目的を持たない。このビジョンは、映画『遊星からの物体X』に登場する地球外生命体のようだ。映画の中でこの生き物は、触れるもの全てに変身〜同一化し食い尽くしていく。現実の、アートの世界にあっては、冷戦下には自由主義のプロパガンダとして利用され、現在はマーケットの中で投機的に制作〜販売され増殖し続ける抽象絵画も、現実の物体Xとして見る事が出来るかもしれない。本作品は、「AI」「物体X」「抽象絵画」「不定形」「自己増殖」などの側面から、資本主義をいかに表象することができるかを検討する。

■略歴

前世紀末付近生まれ。アーティスト、ハードコアパンクバンドcore of bellsのドラマー。
実験音楽やハードコアパンクに影響を受け、音楽とビジュアルアートの領域を区切らない活動を行う。
2016年、2020年Rijksakademie van beeldende kunsten(オランダ、アムステルダム)に滞在。主な個展に2020年「WEEKEND」(藤沢市アートスペース)、2018年「WEEKEND」(Kunstfort, Vijfhuizen/オランダ、フェイフハイゼン)。



4 特別賞

長 雪恵

OSA Yukie

作品名	きょうこのごろ Nowadays
作品サイズ	500×500×500cm
素材	シナベニヤ、マーカー、クレヨン、色鉛筆、水彩、机、椅子 Marker, Crayon, Colored pencil and Watercolor on China plywood, desk, and chair

■作家の言葉

絵をずっと描いてきて、私には沢山の制作物がある。それらの作品の価値は私が抱く想いとは裏腹に、他者の価値観との間にズレがある事を知った。私は過去作を解体し、再構築して新たなもののへアップデートさせる事にした。過去作は私にとって普遍的な物から、特別な素材へと変わっていった。

様々な時代が集積されて出来た画面。
蓄積された時の厚みと重さ。今それらを再構成する私がおりにいる。
その中にある「変わる事」と「変わる中で変わらない事」。
時代は変わり、時間は流れ、そして作品も変わり続ける。

■略歴

東京都生まれ
2004年 多摩美術大学造形表現学部造形学科油画専攻卒業
2005年 第20回国民文化祭・ふくい2005
文部科学大臣奨励賞
2009年 第12回岡本太郎現代芸術賞展 岡本敏子賞
前橋アートコンペライブ2009 ミヤケマイ賞

2010年 岡本太郎の「いきもの」展に作品展示 (岡本太郎記念館/東京)
2017年 2017松濤美術館公募展 優秀賞
SICF 18 石田尚志賞
2018年 SICF受賞者展(スパイラル/東京)
2020年 第6回宮本三郎記念デッサン大賞展 佳作
2021年 いまだかつてあるゆらぎ(AKIBA TAMABI 21/東京)



5 特別賞

小山 恭史

OYAMA Yasufumi

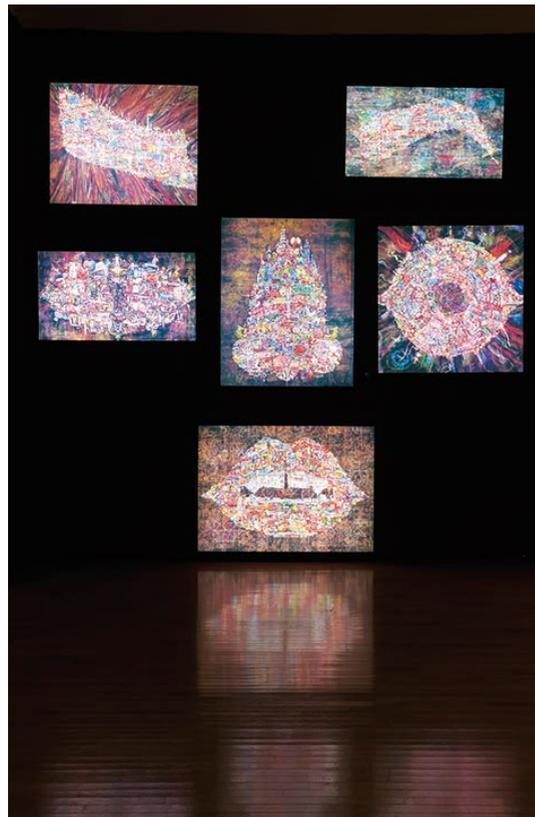
作品名	無明 mummyō
作品サイズ	500×500×20cm
素材	布、木材、LED Fabric, wood, LED light

■作家の言葉

日本の街は戦後、インフラが整い建物が乱立した事によりデザインの概念の無い街作りが進められて来たかのように思う。私たちがイメージする東京や大阪のような街は、実際に目に映る一面というよりそれぞれの記憶の蓄積により、想像し形造られていくものと私には感じられる。私は看板(コマーシャル)を人間の欲望を駆り立て植え付ける物であると思う。食欲、物欲、性欲、承認欲など様々な煩惱の象徴と捉えこの一連の作品を無明(悟りとは最も遠い光)と名付けた。また、幼少時代より父に縄文人はアーティスト集団だったと教えられていたこともあり、その縄文土器の持つ独特なフォルム、禍々しく呪術的で野生的な力を感じ着想を得た。また、コロナウイルスの蔓延により姿を消した店や新たに誕生したスポットなど加速度的に変化していく時代を捉え映し出し、表現した。

■略歴

1987年 神奈川県川崎市生まれ
2002年 川崎市内の中学を卒業後、左官業、高職、解体業、パチンコ店など様々な職を体験
2007年 都内の撮影スタジオ入社、写真を学ぶ
2012年 撮影スタジオ退社、フリーのフォトグラファーとして独立



6 特別賞

クレメンタイン・ナット

Clementine Nuttall

作品名	POT PLANTS!
作品サイズ	250×462×372cm
素材	ジュート、厚紙 Jute, cardboard

■作家の言葉

「POT PLANTS!」は畳のような空間に表現豊かな木の形が立ち上がるインスタレーションです。自然のリズム、共鳴するパターン、そして人間性を反映しています。特に、森林や菌根ネットワークとの本質的なつながりに焦点を当てています。また、飼いやられたものと野生の間の空間を考えさせ、なぜ私たちはしばしば木を「他者」と見なすのか、それがいかに不可分に繋がっているのかを問いかけています。この作品は、私たち人間が気候危機の課題に直面しながら、「人間以上」である自然の世界との関係を定義していくという重要な過渡期の探究として制作しました。観客はこの空間を巡りながら、対話の中で自身の位置を考えるよう招かれています。そして私は、木と共に踊る中で喜びを見つけることを願っています!

■略歴

1983年 英国サウスハンプトン生まれ
2002-04年 ビルディングクラフツ カレッジ、石工専攻
2004-08年 シティ&ギルド オブ ロンドン アート スクール 装飾用木彫専攻
2015-17年 ヨーク大学 建物保存専攻(修士)

2017-19年 東京藝術大学 漆芸専攻(研究生)
2019-22年 東京藝術大学大学院 美術研究科グローバルアートプラクティス専攻(修士)
[受賞・展示]
2015年 ウィンストンチャーチルフェロシップ(日本への渡航支援)
2019年 銀座ショートフィルムコンテスト 最優秀作品賞《UNBROKEN》
「ボザール・ド・パリ×東京藝術大学グローバルアート共同プロジェクト」参加
2020年 アートセンター東京(新宿)「クリエイター彫刻シリーズVol.7」参加 《AFTER》出品
平柳田中郎(東京)にて「金継ぎ Memory of a Moment」文部科学省奨学生
取手アートプロジェクト「The Studio Next Door」にて4ヶ月間滞在制 《MATERIAL GARDEN》出品
2022年 東京藝術大学卒業制作展(東京)参加 《EUTERRIA》出品
2023年 Omonna Tent Art Gallery(茨城)にて個展「LONG SHADOW 長い影」開催、複数作品出品



7 特別賞

月光社

Gekkosha

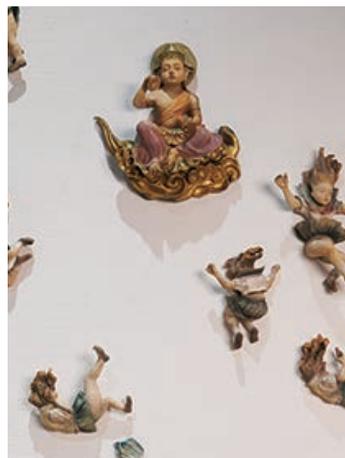
作品名	MUSAKARI
作品サイズ	400×120×120cm
素材	テラコッタ、粘土、レース、包帯 Terracotta, clay, lace, bandages

■作家の言葉

ウクライナの戦争において戦場に赴く未婚のウクライナ兵が精子を凍結保存し、自らが死んだとしても子をなそうとしているというニュースに接したとき日本の東北地方に存在する神事「むさかり」との照応を見出した。「むさかり」とは未婚のまま死んだ子供の為架空の配偶者の像を絵馬に描き奉納することで死後の世界での婚姻を成就させる神事である。生涯未婚率が40%にも達するこの国で全ての未婚の死者に向けて、死者に捧げる人形「備」を用いて「むさかり」の祭壇をしつらえてみた。

■略歴

つじとしゆきを中心とする人形制作グループとして1996年に発足。現在は死者に捧げる人形「備」の制作を中心につじとしゆきのソロプロジェクトとして活動中。
1997年 第12回ユザワヤ大賞 銅賞受賞
1999年 新世紀人形展 日向あき子賞・藤田博史賞受賞
2004年 グループ展「球体関節人形展」東京都現代美術館
2006年 文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門受賞



8 特別賞

小山 久美子

KOYAMA Kumiko

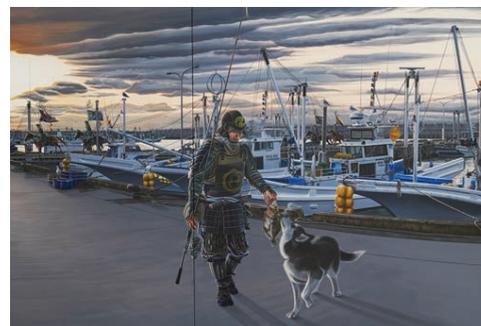
作品名	三月、常陸國にて鮫鯨を食ふ Eating Anglerfish in Hitachi Province in March
作品サイズ	162×448cm
素材	アクリル、キャンバス、パネル Acrylic on canvas, panel

■作家の言葉

座標の離れたものを組み合わせて、違和感から漂う可笑しみを伝えたいです。
あんこうが有名な大洗港。朝焼けのなかにズラッと並んだ漁船、北へ向かう巨大な船、完成間近の水門…この風光明媚な土地では、行軍中の武士団も足を休めて地のものを楽しむのだろうな。なんて想像していたら「とって食べる」ことは、古今東西を問わず原始的な喜びなんだと気づきました。

■略歴

1983年 埼玉県生まれ
2014年 個展「閑雲野鶴」(space 2*3/東京)
シェル美術賞展(国立新美術館/東京)
2015年 ARTAWARD NEXT III 大賞(東京美術倶楽部/東京)
新生絵画賞 大賞(新生堂/東京)
2019年 個展「五穀奉納」(新生堂/東京)
2021年 個展「犬之箱庭」(space 2*3/東京)
2022年 個展「鳥兔匆匆」(Gallery MUMON/東京)
2023年 個展「渺」(新生堂/東京)



9 特別賞

ZENG
HUIRU

作品名	BACK TO ME
作品サイズ	300×400×180cm
素材	陶磁器、針金、金属 Ceramics, wire, metal

■作家の言葉

帰り道、道端に留まるカラスを見つけた。おなじような風景をむかし見たような気がする。記憶の中でカラスの姿が、過去と現在の間で重なり合い、現実と想像の間で交差する旅へと誘う。

カラスは、昔から黒く、どこか闇を彷彿とさせる生き物として扱われていることが多い。しかし、それは我々が過ごしている日常のすぐそばにいて、世の中にいる生き物のひとつに過ぎない。

今回の作品では、普段、固定概念によって距離を置いているものでも、ふとした瞬間、同じ空間の中で共存しているのだということを再認識するきっかけになればと思う。

■略歴

2022年 京都精華大学大学院 芸術研究科(陶芸専攻)修了
2023年 京都精華大学大学院 芸術研究科博士後期芸術専攻 入学
現在 一年生として在籍中

【展示】

2020年 グループ展「FIRST STEP EXHIBITION」(ギャラリーG77/京都)
2021年 「笠間陶芸大賞展2021」(茨城県陶芸美術館)
「第75回堺市展」(堺市立文化館)
2022年 「京都花鳥館賞2022」(京都花鳥館)
2023年 「陶芸tomorrow展」(ギャラリーマロニエ/京都)
「2023城跡芸術展」(丹波亀山城跡(大本本部))



10 特別賞

タツルハタヤマ
TATSURU HATAYAMA

作品名	小鳥のさえずりを聞くと、遠くで銃声が鳴り響いた A gunshot rang out in the distance when we heard the birds chirping
作品サイズ	500×500×500cm
素材	紙にアクリル絵の具、木炭、アクリルインク、スプレー、パステル、オイルパステル Acrylic paint, charcoal, acrylic ink, spray, pastel, oil pastel on paper

■作家の言葉

SNSによって遠くの国で起きている戦争などのニュースが手元で確認できるようになった。一つのタイムラインに今起きている凄惨な現実と自分や友人たちのパーソナルな生活についての情報が隣り合わせで大量に表示される画面は異質で、社会問題と私事の境があいまいになるような感覚になった。そのことをきっかけにテレビのニュースや新聞記事、アトリエから見た風景、友人、近所の草花などが多様な色と線、イメージが複雑に絡み合い、共存するドローイング空間を制作した。

■略歴

2001年 神奈川県生まれ
現在 多摩美術大学在籍中
【活動・展示歴】
2021年 シェル美術賞展2021入選(国立新美術館/六本木)
2022年 第25回グラフィック「1_WALL」展ファイナリスト(ガーデン・ガーデン/銀座)
SUPER OPEN STUDIO 2022(相模原市)
大木裕之presents<超たまたま19>(KOGANEI ART SPOTシャトー2F/小金井市)
2023年 SUPER OPEN STUDIO 2023(相模原市)



11 特別賞

フロリアン・ガデン

FLORIAN GADENNE

作品名	Anomalies poétiques／詩的異常 Poetic Anomalies
作品サイズ	282×228cm
素材	紙、水彩、墨、ガッシュ Watercolour, ink and gouache on paper

作家の言葉

気候大変動、生態系破壊、経済格差…。世界中の科学者が具体的な行動を求めている。私たちがこの世界の現実を咀嚼し、思考するのに必要なのは、むしろ想像力に満ちたフィクションなのだ。日々の生活における不安や恐怖を超越するための叙情的な視座。作品《Anomalies poétiques／(詩的異常)》は、私たちが遊び心に満ちた虚構へ誘う。大衆文化に養われた凡庸で孤独な詩作は、こうして生命の息吹を得る。

略歴

1987年 フランス・パリ生まれ
2013年 ナント＝サン＝ナゼール高等美術学校修了(修士号)

[受賞歴]

2017年 現代アートフェスティバル《Paris Artistes》入選(パリ、フランス)
2023年 第10回500m美術館賞 グランプリ賞(札幌)
FACE 2023 入選(東京)
清流の国ぎふ芸術祭2023 Art in the Cube 入選

[主な展覧会]

2017年 個展《monade》(La Meuniserie de Therdonn／テルドン、フランス)
2018年 二人展《Orbite elliptique: 松田有加里×フロリアン・ガデン》(galleryサラ/滋賀)
2022年 グループ展「ファルマコン：新生への捧げもの」(The Terminal KYOTO／京都)



12 特別賞

村上力

MURAKAMI Tsutomu

作品名	学校 School
作品サイズ	430×450×450cm
素材	麻布、樹脂、漆、木、発泡スチロール、塗料、机、椅子、本、他 Mixed media

作家の言葉

1968年の夏、小学1年生の私は東京から広島に転校した。初めて見る原爆ドームはとても渋くてカッコよかった。幼い私の中に歴史的なモノが意識された最初の経験だった。さて、これは建設途中のパベルの塔ではない。完成されぬまま放棄された廃墟である。歴史はこんな風に、時計回りに螺旋階段を下ってきて、現在と繋がっている。そう。確かに歴史は生きている。但し現在と接する、まさにその境界でのみ生きられるに過ぎない。貝殻を後に残しながら、入口だけ粘膜に覆われて成長し続ける巻貝の様に。その最前線はぐにやぐにやして心許ないが、唯一生命の宿る場所であることは間違いない。そして、私はそこを「学校」と呼ぶのである。

略歴

1961年 東京都生まれ
1985年 日本大学芸術学部卒業

[展示]

2009年 第8回あさご芸術の森大賞展 準大賞(あさご芸術の森美術館)
2011年 第20回富嶽ビエンナーレ展 佳作賞(静岡県立美術館)
2018年 第21回岡本太郎現代芸術賞展(川崎市岡本太郎美術館)
2019年 第7回日本芸術センター彫刻コンクール 金賞(日本芸術会館)
第55回神奈川県美術展 特選(神奈川県民ホールギャラリー)
2020年 第23回岡本太郎現代芸術賞展 特別賞(川崎市岡本太郎美術館)
2021年 第8回日本芸術センター彫刻コンクール 銅賞(日本芸術会館)
2022年 第25回岡本太郎現代芸術賞展 特別賞(川崎市岡本太郎美術館)



13 入選

大河原 健太

OKAWARA Kenta

作品名	文字前夜 一火水風土ー Eve of Characters -fire, water, wind, Gaia-
作品サイズ	118.9×450cm
素材	紙、インク Paper, ink

■作家の言葉

登山をはじめ1年と少し経ちます。今回の作品はその経験が少なからず影響していると思います。登山をしている時と、普段の都市生活とは何が違うのかを少し考えてみました。ご飯が美味しい。木々の変化に季節を感じる。体が疲れて夜よく眠れる。それらのことを日常で意識することはそう多くありません。どちらかというと、コンピュータや人との会話などの「情報」に興味に向いています。脱情報とまでは言わずとも、制作している時間は心が自然の中にいる時と近い状態になっているような気がします。



■略歴

【経歴】

1983年 福島県生まれ
2007年 武蔵野美術大学視覚伝達デザイン学科卒業
[受賞・展示]
2012年 第60回朝日広告賞 イラストレーション賞受賞
「大河原健太」個展(ギャラリー風帰来/神楽坂)
「cave report」個展(maruse B1 gallery/目黒)
2021年 SICF23出展(スパイラル/表参道)
「under the sky person」個展(Gallery Dalston/墨田区)
2022年 「日本大学芸術学部デザイン学科新任教員展」(A&D gallery/江古田)

14 入選

遅四グランプリ
実行委員会

OSO (Operation team of SLOW
MINI 4WD GP Organization)

作品名	遅博2024 ー人類の進歩と遅延ー SLOW EXPO 2024 -Progress and Delay for Mankind-
作品サイズ	500×500×500cm
素材	ミクストメディア(ミニ四駆、アート、工芸、映画、音楽、文学、食、服飾、漫画、落語、伝統文化、他) Mixed media (MINI 4WD, Art, Craft, Film, Music, Literature, Food, Fashion, Comic, Rakugo, Traditional culture, etc.)

■作家の言葉

我々は「速い(早い)」ことが持て囃される加速主義社会の現代において、競争という資本主義の基本システムを採用しつつも、「遅い」ことの美学に着目した「遅イズム」を提唱しています。そしてミニ四駆のレースだけにとどまらず、アート、工芸、映画、音楽、文学、食、服飾、漫画、落語、伝統文化などあらゆるジャンルの文化活動への多角的進出を目指します。「遅博2024 ー人類の進歩と遅延ー」はそんな遅イズムによって生まれた文化・芸術を一堂に集めた博覧会です。最新の速(早)技術の祭典である「大阪・関西万博 EXPO 2025」を翌年に控えた2024年春、まずは「遅博2024」をごゆっくりとお楽しみください。



■略歴

「遅四グランプリ」は2021年に発案者の島本多の呼びかけのもと三原回、吉田山、杉野晋平、硬軟、やんツーらが集まり始まった一番遅いミニ四駆を決めるレース大会です。これまで4回の世界大会と多くの地域大会や関連展示などの活動を続けてきました。



15 入選

GORILLA
PARK

作品名	Relief-1, Relie-2, Relief-3, Relief-4
作品サイズ	157×430×8cm
素材	木、岩絵具 Wood, mineral pigments

■作家の言葉

地球上にある特定のイメージを現実の物質として再構築している。人間が認知することが出来ず、見たことのない物体を、普遍的な素材を使い、人の手で創ろうと模索する。

■略歴

1998年 埼玉県生まれ
2021年 武蔵野美術大学造形学部彫刻学科卒業
2023年 東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修士課程修了
【個展】
2021年 「宇宙人の幽霊に会ってみたい」(GALLERY TAGA 2 /東京)
2023年 「万華鏡」(biscuit gallery/東京)
【グループ展】
2023年 「ART AWARD TOKYO MARUNOUCHI 2023」(行幸地下ギャラリー/東京)
「SO」(HIRO OKAMOTO/東京)
「第71回東京藝術大学卒業・修了作品展」(東京藝術大学/東京)

【受賞歴】

2020年 CAF2020入選作品展覧会 海外渡航費授与
2021年 ART AWARD TOKYO MARUNOUCHI 2021 長谷川新賞
2023年 卒業・修了作品賞上
ART AWARD TOKYO MARUNOUCHI 2023 OCA TOKYO賞



16 入選

鈴木 のぞみ

SUZUKI Nozomi

作品名	Light of Other Days: 吉田理容室 Light of Other Days: Yoshida Barber Shop
作品サイズ	260×500×500cm
素材	解体された理容室の鏡、窓、扉、時計、額縁、写真乳剤 Mirrors, windows, a door, a clock and a frame from a demolished barbershop, photosensitive emulsion

■作家の言葉

光の諸現象により事物に見出すことができる潜像を(事物の記憶)であると捉え、写真の原理を通して顕在化を試みています。この作品では、前橋市で営まれていた吉田理容室の鏡や窓など時を経た事物に写真の感光乳剤を塗布することで、鏡がかつて反射していた室内の風景や、窓ガラスが透過していた外界の風景を直接定着しています。窓や鏡、時計、額縁などに定着された光景は、それらの事物がかつて理容室の空間において人知れず形成していたイメージであり、事物が捉えていた日常の風景です。

■略歴

1983年埼玉県生まれ。2022年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。平成30年度ポーラ美術振興財団在外研修員としてイギリスにて研修。主な展覧会に2016年「NEW VISION SAITAMA 5 迫り出す身体」埼玉県立近代美術館(埼玉)、2017年「Mirrors and Windows」表参道画廊(東京)、「無垢と経験の写真 日本の新進作家 vol.14」東京都写真美術館(東京)、2022年「メディアムとディメンション: Liminal」柿の木荘(東京)、「潜在景色」アーツ前橋(群馬)、2023年「Words of Light」さいたま国際芸術祭(埼

玉)、など。

2016年「VOCA展2016 現代美術の展望ー新しい平面の作家たち」VOCA奨励賞受賞。

※協力: 藤田朱美、北澤ひろみ、原田崇人、高野順一郎、中一恵、村田桂吾、小坂部尚吾、本間大悟、太田祐司



17 入選

野村 絵梨

NOMURA Eri

作品名	垢も身のうち Dirt is also part of the body
作品サイズ	500×500×500cm
素材	スタイロフォーム、軽量パテ、ウレタン塗料 Styrofoam, putty, urethane paint

■ 作家の言葉

この作品は、作家が暮らす部屋をモデルにしている。3DCGで人形遊びのおもちゃのような形にデフォルメし、そのデザインを元にスタイロフォームで彫刻した。ここ数年家で過ごすことが増えた。改めて部屋を見渡すと、何となくごちゃごちゃしている。元々足の踏み場もないほど物の多い家に住んでいて、それが普通だったので、雑多な部屋は落ち着く。

はじめに床に落ちていたコロコロを作った。猫の毛や埃が付いている。普段はすぐに捨てる紙の表面を、その時初めてじっくりと観察した。

この展示では、生活の中で生まれた垢のようなものとの暮らしを見つめ、再構築する。

■ 略歴

[経歴]

- 1990年 東京都生まれ
- 2017年 東京藝術大学美術学部彫刻学科卒業
- 2019年 東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻 修了

[展示]

- 2019年 流動的身体の旅 (GALLERY MoMo Projects/東京)
- 2021年 SILHOUETTE, SCHATTEN (個展、エースホテル京都)
- 2022年 複号の彫刻家たち展 (ファール立川街区/東京)
- 2023年 垢も身のうち (個展、AMMON TOKYO & WADA GAROU TOKYO Lab./東京)
- Dutch Auction "ART NOW vol.3" (銀座 蔦屋書店/東京)



18 入選

林 楷人

HAYASHI Kaito

作品名	調和の剥き出し Revealing Harmony
作品サイズ	325×500×500cm
素材	岩絵具、膠、麻紙、鏡、複製版画、他 Mineral pigments, animal glue, hemp paper, mirror stands, reissued prints, etc.

■ 作家の言葉

作画中、調和を図る判断に迷えば、絵を逆さに見て吟味するよう、古くから推奨されています。ならば、均整を極めた絵は上下反転でも、調和の具現でしょう。ここでの名画の反転は価値観に関わる転覆ではなく、構成美を吟味する対象物への転用です。調和の希求を目的として、拙作と名画が同じ土俵に立つことに与り、展示の様相転換で、調和の本質に触れます。鏡中の左右反対を正像のように錯覚するかもしれません。先人達と同一座標上で、永遠性を持った希求は続きます。

■ 略歴

- 1961年 神奈川県生まれ
- 1980年 京都市立日吉ヶ丘高校美術工芸コース(現:京都市立美術工芸高校)日本画科卒業
- 1987年 慶應義塾大学文学部卒業
- 2012年 第23回臥龍桜日本画大賞展奨励賞
- 2013年 舞台総合芸術「破調の試み」上演(軽井沢大賀ホール)
- 2015-16年 第18回・第19回岡本太郎現代芸術賞 入選
- 2017年 第2回 アートオリンピック 2017 入選
- 2019年 軽井沢に集う4人の作家展 出品(軽井沢千住博美術館ギャラリー)

- 2022年 第4回 アートオリンピック 2022 入賞
- 2023年 第四回 全日本芸術公募展 入選



19 入選

村尾 かずこ

MURAO Kazuko

作品名	サザエハウス -Village- Sazae House -Village-
作品サイズ	370×400×400cm
素材	貝殻、ワイヤーメッシュ、金網、セメント、漆喰、ガラス、テグス Shell, wire mesh, cement, etc.

■ 作家の言葉

サザエは日本の沿岸に生息する貝である。名前には「小さな家」という意味があるらしい。私は、海辺で拾ったり、食べたりしたサザエの貝殻に理想のマイホームを妄想し続けてきた。「サザエハウス -Village-」は実際に入ってみることのできる家であり、小さな家が集まった集落のイメージでもある。サザエは「支え」であり、人は支えあって共生する。それぞれの家にはそこに住まう人々がいる。そこに誰かがいる。私もいる。

■ 略歴

- 1965年 東京都生まれ
- 1988年 武蔵野美術短期大学専攻科修了
- 2005年 以後毎年石灰の産地大分県津久見市で「夏のフレッシュコ画教室」の講師
- 2009年 「マクロ研究会加盟店漆喰看板プロジェクト」(大分県津久見市)
- 2013年 瀬戸内国際芸術祭「漆喰鏝絵看板プロジェクト」(香川県本島)
- 2015年 左官技能士2級取得
- 2017年 奥能登国際芸術祭「サザエハウス」(石川県珠洲市)
- 2021年 すみだ向島expo「京島植物園」(東京都墨田区)

[著書]

- 絵本『どぞうーさかんやさんのどぞうづくり』(sabu出版2005)
- 『塗り壁が生まれた風景』(小林澄夫氏との共著 農文協2018)



20 入選

横岑 竜之

YOKOMINE Tatsuyuki

作品名	ハッピーモンスター Happy Monster
作品サイズ	500×500×500cm
素材	キャンバス、アクリル絵の具、樹脂、プラスチック、ぬいぐるみ、木材、いろいろ Canvas, acrylic paints, resins, plastics, stuffed toys, woods, etc

■ 作家の言葉

「ハッピーモンスター」
見る人を元気にさせる。それがハッピーモンスター。ぜひあなただけのハッピーモンスターを、みつけて下さい。大阪を拠点とし、主に大阪での個展を月1のペースで開催。自身が生み出したオリジナルキャラクター「ハッピーモンスター」の絵を壁全てに飾り、捨てられた古い物などにもハッピーモンスターを直接描き込み、新しい命を吹き込む。見る人を元気にするのがハッピーモンスターであり、彼のアートである。

■ 略歴

- 大阪芸術大学出身
- [展示]
- 2022年 ARTOSAKA2021.2022. 展示(大阪中央公会堂) 大阪高級ホテル「WJ」ホテルイベント展示(大阪)
- 2023年 「ハッピーモンスター展」タグボート大正大阪 個展開催(大阪)計10回程 「ハッピーモンスター展」個展(Laugh & Peace Art Gallery (大阪吉本)) 計2回程
- [主なTV出演]
- 2018年 「なるみ岡村の過ぎるTV」出演(ABCテレビ)
- 2020年 「明石家さんま転職de天職」全国放送TV出演

- 「明石家さんま画廊」初出演 展示(東京)(日本テレビ)
- 「誰も知らない明石家さんま」全国放送TV出演 「明石家さんま画廊」出演二回目 展示(東京)(日本テレビ)
- 2022年 ANYKOB2022出演(サンテレビ) 「誰も知らない明石家さんま」全国放送TV出演(日本テレビ)
- 「明石家さんま画廊」出演三回目 東京中央オークション出品 出演



21 入選

横山 豊蘭

YOKOYAMA Houran

作品名	トロトロ遺跡 Toro Toro Ruins
作品サイズ	500×500×300cm
素材	墨、新聞紙、画仙紙、ペンキ、写真、石、木材、缶詰 Sumi ink, newspaper, painting paper, paint, photograph, stone, wood, canning

■作家の言葉

書とは何か？ 意味も無意味も超えた根源的な何か。思考、爆発に触れる、量子的な書に興味がある。岡本太郎の対極主義と赤瀬川原平の「宇宙の缶詰」（1964）に触発され、1999年の個展で制作した「書道の缶詰」。あれから激動の23年間、あらゆるモノが飛び出し、そして何が残ったか？ 缶詰の中身を取り出し、ラベルを中に裏替えし、蓋をする。新たな「書道の缶詰 ～開ける・な～2024」として制作。それ神、中身は「虚」にして「霊」ありか？ パンドラの光か？ 猫は生きているか？ あるいはただのスペース・デブリか？ 書のエキスを絞り出す。

■略歴

1973年 静岡県生まれ
1996年 名古屋芸術大学絵画科洋画専攻卒業
2001年 杏林大学社会科学部大学院国際協力研究科国際文化交流専攻博士課程前期修了

【主な公募展】

1997年 「アーバナー#6」展 グランプリ受賞

2021年 日展 入選

【主な展示 個展等】

1998年 「臨書」(University of Michigan, Media union gallery/

Michigan, USA)
1999年 「礼」(PARCOギャラリー/名古屋)
2010年 「Edition 3」(YEBISU ART LABO./名古屋)
2011年 「Re: Japan」(gallery graphite/Williamsburg, USA)
2005年 「GUNDAM-来たるべき未来のために-」(サントリーミュージアム天保山/大阪、以後全国巡回～07年)
2006年 日中国際交流「形式と拓」(中央美術学院美術館/北京市、中国)
2007年 「DOCOMODAKE Art Exhibition」(NTT DoCoMo USA, Inc., New York, USA(巡回08年 ICC/東京)
2018年 「JAPAN EXPO in Paris」(WABI SABI パビリオン/Paris, FR)
「書の身体」清流の国ぎふ芸術祭(岐阜県美術館)
2022年 「岐阜 後楽荘 横山豊蘭展」清流の国ぎふ芸術祭(後楽荘/岐阜)



22 入選

李 函樞

LI Hanxun

作品名	無から来る、無故に集う Arising from Sunyata, gathering from Sunyata
作品サイズ	200×172×156cm
素材	洋紙、古書、発泡スチロール、のり、電気 Paper, ancient books, styrofoam, rice paste, electric lamp

■作家の言葉

2022年2月私は突然、死と正面から向き合うようになったことに気づいた。そして自己と世界の関係を探し始めた。私たちの世界は巨大なエネルギーである。しかし私たちはカラフルで破片だらけな表象でしか意識していない。その原因は、私の周りのすべての存在はエネルギーの破片だからだ。これらのエネルギーはどこに来るのではなく、どこに行くのではない。文字はその破片だらけな塊を固める力がある。世界各地の言葉が書かれた紙を仏像に貼って、文字の表象と文字の持つ秘めたエネルギーの力を感じられるようにした。

■略歴

1997年 中国福建生まれ
2023年 武蔵野美術大学美術学科彫刻専攻卒業
東京藝術大学大学院美術学科彫刻専攻入学
第107回二科賞 入選
野良の芸術 大地の鼓動 (Art of Nora 2023 The Breath of the earth)



過去の受賞者

第1回 岡本太郎記念現代芸術大賞(1997年)

応募総数 482点
会場 旧水川幼稚園
【準大賞】中山ダイスケ《DELICATE 1996》、金沢健一《音のかけら5》
【入選者】アラキヒロユキ、安里充広、井上尚子、キブシ、木村俊幸、高橋俊明、豊島隆弘、宮園広幸

第2回 岡本太郎記念現代芸術大賞(1998年)

応募総数 307点
会場 国立オリンピック記念青少年総合センター
【準大賞】小沢剛《ワンマングループショー》、粟野ユミト《関》
【特別賞】市川健治《Double Image》、市川平《モニュメント》
【入選者】青山メイジ、阿部佳明、石井匠、小野博、軽部武宏、川上和歌子、佐藤久一、佐藤仁美、清水尚、田中清隆、豊島隆弘、中村桃子、長谷川双葉、服部俊弘、山谷あきら、山本忠興

第3回 岡本太郎記念現代芸術大賞(1999年)

応募総数 413点
会場 国立オリンピック記念青少年総合センター
【準大賞】N.キデヒト《終わらないにらめこの抜け殻》
藤阪新吾《よいこの学習》
【特別賞】SAR《壁のない部屋》、菱川俊作《死の肖像》
【入選者】飯沢コウスケ、売野恭子、大岩オスカール幸男、河合晋平、佐藤誠一、佐野寿子、田村真理子、藤井浩一郎、伏黒歩、ムラギシマナブ、元島佐織

第4回 岡本太郎記念現代芸術大賞(2000年)

応募総数 513点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【優秀賞】開発好明《VANITY》
山口晃《山愚痴詠詩・尻馬八艘飛乃段》
【特別賞】許田敏子《テッコ》
【入選者】荒木珠奈、池島弘、坂井存、笹井史恵、杉山健司、セツズギ、田窪麻周、田島弘庸、中村真紀、西尾康之、日高伸治、水野亮、山本真紀、渡辺五大

第5回 岡本太郎記念現代芸術大賞(2001年)

応募総数 327点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【準大賞】今井紀彰《On The Earth: ぼくの故郷》
【優秀賞】ヒグマ春夫《DIFFERENCE》
【特別賞】池上恵一《肩凝リズム》、小原由子《Did you Say you were lice?》
【入選者】糸崎公朗、猪鼻秀一、大西康明、尾上正樹、木村俊幸、坂口啓子、佐藤修一、ソガヒロシ、趙採沃、戸田守宣、白前晋、牡丹靖佳、村上章一

第6回 岡本太郎記念現代芸術大賞(2002年)

応募総数 351点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【優秀賞】天明屋尚《ネオ千手観音》
えぐりか《ストレンジ・ライフ》
【特別賞】宇間敏宏《colony》、大橋博《fantasia》、宇治野宗輝《日本シリーズコンプレックス》、井上亜梨沙《愛染狂 カレイドスコープ》、大巻伸嗣《ECHO》、秋元珠江《パーセンテージ》

【入選者】内海聖史、小市亮二、高島大理、青木克世、久保田純代、小松宏誠、吉沢美沙、小林エリカ・ハマダカオリ、さとうりさ

第7回 岡本太郎記念現代芸術大賞(2003年)

応募総数 519点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【優秀賞】小林洋子《時積層》
【特別賞】赤松ネロ《深海の天気》、さとう 凛香《個人ロッカー一個展》、原倫太郎《Wire Frame Towers ver.2》、横井山泰《わるいくせ》
【入選者】櫻谷豪人、加藤万也、金子佳代、塩谷良太、竹内美紀子、中崎透、長瀬公彦、中島靖貴、初耳、藤井健仁、水谷一、48のネオン

第8回 岡本太郎記念現代芸術大賞(2004年)

応募総数 533点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【準大賞】藤井健仁《彫刻刑 鉄面皮プラス》
【優秀賞】さかもとゆり《にくにくトントン》
山本竜基《個人内戦1、2》
【特別賞】斎藤公平《選外》、棚田康司《父を待つ少年・母を待つ少年》《蝶少女・天少女・花少女》《少女像》
【入選者】今井綾子、岩本愛子、大西伸明、小俣英彦、嶋田洋平、鈴木貴博、高山真理、タムラサトル、知花玲央、もりのしんじ、平町公、渡辺一杉、平間さゆり、屋代敏博、矢部真知己、松村泰三、山本忠興

第9回 岡本太郎記念現代芸術大賞(2005年)

応募総数 518点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【準大賞】梅津庸一《銀色の僕》
【優秀賞】風間サチコ《風雲13号地》
【特別賞】アサノカオリ《あたまがよくなるくすりを飲んだ》、角文平×田中雄一郎《おかえり江戸城》、まつながあきこ《青く青く晴れわたる空にも雨は降り》
【入選者】石田泰道、石原次郎、市川健治、大竹利絵子、賀川剣史、風間真悟、岸本京子、関口海音、君島彩子、鮫島大輔、出店久夫、長谷川ちか子、東野哲史、深井聡一郎、深堀隆介、前田紗野花、和田彰

第10回 岡本太郎現代芸術賞(2006年)

応募総数 614点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】大西康明《restriction sight》
【岡本敏子賞】菱川俊作《スペシャルグリッド&アザーストリーズ》
【特別賞】角文平×田中雄一郎《ガラージキット》
【入選者】Antenna、山好哉、池田学、伊東宣明、狩野哲郎、笠木絵津子、松本真由子、村田恒、澤田サンダー×増山麗奈、竹内翔、戸泉恵徳、矢部ひろすけ、山口理一

第11回 岡本太郎現代芸術賞(2007年)

応募総数 678点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】KOSUGE 1-16《サイクロドルームゲームDX》
【岡本敏子賞】上田順平《パチモンガタリ(キンタウルス、イッ

スンサム、ピーチ太郎、アカオニクラウスの首、アカオニクラウスの靴》
【特別賞】ALIMO《リーゾー》、ヤマガミユキヒロ《Night Watch》、金子良／のびアニキ《のびアニキの「岡本稷太郎現代芸術賞展」》
【入選者】青木美歌、イノウエミゆき、ENERGY CENTER、勝正光、岡谷隆志、後藤靖香、齊藤寛之、塩津淳司、四宮金一、随行奏子、鈴木基真、竹内尚子、田中英行、谷口顕一郎、中村宏太、palla／河原和彦、耀樹考鷲鷲、吉谷慶太、吉田翔

第12回 岡本太郎現代芸術賞(2008年)

応募総数 611点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】若木くるみ《面》
【岡本敏子賞】長雪恵《こどものころ》
【特別賞】山上渡《ウシロノショウメン》、タムラサトル《50の白熱灯のための接点》、花岡伸宏《ずれ落ちた背中は飯に突き刺さる》、佐藤雅晴《アバター-11》
【入選者】ALIMO、坂田竜太、井口雄介、小田原のどか、古池潤也、坂口竜太、笹倉洋平、柴田英里、島本了多・エースナカジマ、田中麻記子、長谷川義朗、福井直子、宮崎直孝、森靖、淀川テクニック

第13回 岡本太郎現代芸術賞(2009年)

応募総数 758点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】三家俊彦《The indignant》
【岡本敏子賞】辻牧子《日常の柔らかな化石》
【特別賞】ながさわたかひろ《プロ野球画報》、長谷川学《風の前の塵》
【入選者】浅野健一、入江早耶、梅田哲也、薩山忠臣、加藤翼、鎌倉明弘、木村リン太郎、クニト、サガキケイタ、島本了多、須賀悠介、高橋和臣、高橋良、田辺朋宣、Natsu、原田賢幸、東方悠平、矢津吉隆

第14回 岡本太郎現代芸術賞(2010年)

応募総数 818点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】オル太《つちくれの祠》
【岡本敏子賞】望月俊孝《うつつみ》
【特別賞】北野謙《our face project》、照沼敦朗《見えるか?》、山本麻璃絵《ものモノ》
【入選者】秋永邦洋、池田典子、上田尚宏、大垣美穂子、おおば英ゆき、大森隆義、加藤正臣、金子良／のびアニキ、鎌田あや、川埜龍三、衣川泰典、熊澤未来子、高野浩子、コフネトモ子、坂本夏海、島本了多、高嶋英男、チームやめよう、藤堂安規、二藤建人、松延総司、諸橋建太郎(BARBARA DARLING)

第15回 岡本太郎現代芸術賞(2011年)

応募総数 797点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】関口光太郎《感性ネジ》
【岡本敏子賞】千葉和成《ダンテ「神曲」千葉和成 現代解釈集「地獄篇1〜7圖」》
【特別賞】坂間真実《欲べる(たべる)、吐べる(たべる)》、メガネ《Energy of dance》
【入選者】石井誠、猪原隆広、AKI INOMATA、太田祐司、加藤大介、加納俊輔、北村章、佐藤隼、柴田英里、島本了多と山本

貴大、高木智広、高柳明、竹川宣彰、武田海、CHIE、東北画は可能か?、丹羽由梨香、松山賢、安田葉、湯真藤子

第16回 岡本太郎現代芸術賞(2012年)

応募総数 739点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】加藤智大《鉄茶室徹亭》
【岡本敏子賞】石山浩達《Alien Vision : unlimited oil》
【特別賞】内山翔二郎《Never die》、eje(エヘ)《ものおと》、栗原寿行《Eye》、小松原智史《コマノエ》、湯浅芽美《Momently stratum》
【入選者】赤川芳之、井口雄介、池平徹兵、伊藤純代、伊奈章之、宇山聡範、太田侑子、狩野宏明、熊野海、國分郁子、白井忠俊、葉栗剛、宮崎勇次郎、村上幸織、鷲尾圭介

第17回 岡本太郎現代芸術賞(2013年)

応募総数 780点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】キューンチョメ《まっかにながれる》
【岡本敏子賞】サエボーグ《Slaughterhouse-9》
【特別賞】アートホーリーメン《HORYMANと賊》、小松葉月《果たし状》、じゃばにか《悪ノリSNS「芸術は炎上だ!」》、高本敦基《The Fall》
【入選者】赤松音呂、栗真由美、小山真徳、鈴木雄介、田中偉一郎×田中十郎、知花玲央、長尾恵那、中村亮一、萩谷但馬、廣田真丈、文谷有佳里、柵木愛子、吉田晋之介、吉田和夏

第18回 岡本太郎現代芸術賞(2014年)

応募総数 672点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】ヨタ／Yoita《金時》
【岡本敏子賞】久松知子《レベゼン 日本の美術》
【特別賞】江頭誠《神宮寺宮型八棟造》、佐野友紀《アウラの逆襲》、藤村祥馬《どれいちゃん号》、村井祐希《Landscape - TOMIOKA》
【入選者】吾妻吟、足立篤史、石井明日香、石塚嘉宏、石山哲央、菊谷達史と四井雄大、金藤みなみ、構想計画所、澤井昌平、謝花翔陽、杉山恭平、豊福亮、檜木野淑子、林楷人、平林貴宏、牧田愛、的野真祐、三井淑香、森村誠、山崎広樹、湯川洋康・中安恵一

第19回 岡本太郎現代芸術賞(2015年)

応募総数 485点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】三宅感《青空があるでしょう》
【岡本敏子賞】折原智江《ミス煎餅》
【特別賞】笹岡由梨子《Atem》
【入選者】井田大介、岩村遠・鹿毛倫太郎・古賀睦、楯の会 林楷人、川久保ジョイ、國本翼、関川耕嗣、TEAM WARERA、辻元百合子、坪井康宏、二藤建人、花沢忍、原田武、本郷芳哉、松下敦子、三角暁、村上佳苗、村上慧、森本孝、横山奈美、六無

第20回 岡本太郎現代芸術賞(2016年)

応募総数 499点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】山本直樹《Miss ileのみた風景》
【岡本敏子賞】井原宏路《Cycling》

【特別賞】井上裕起《salamander [F1]》、黒木重雄《One Day》、あべゆか《BE GOD》
【入選者】井口雄介、石野平四郎、因幡都頼、繪畑彩子、岡野里香、奥村彰一、加藤真史、川上幸子、工藤千尋、後藤拓朗、Scott Allen、鈴木伸吾、照屋美優、壽山凡太郎、富田美穂、ナルコ、福嶋幸平、福本歩、MYU mikki、山田弘幸、ユアサエボン

第21回 岡本太郎現代芸術賞(2017年)

応募総数 558点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】さいあくこななちゃん《芸術はロックンロールだ》
【岡本敏子賞】弓指寛治《Oの慰霊》
【特別賞】市川チユン《白い鐘》、富安由真《in-between》、ユウキユキ《ユキテラス大御神☆天岩戸伝説》
【入選者】荒川朋子、ichiko Funai、大野修平、黒木重雄、黒宮菜葉、木暮奈津子、近藤祐史、笹田晋平、塩見真由、橋本悠香、藤本りか、文田聖二、細沼凌史、○△□《まるさんかくしかく》、村上力、室井悠輔、矢成光生、横山信人、吉田美希子、与那覇俊、ワタリドリ計画《麻生知子・竹内明子》

第22回 岡本太郎現代芸術賞(2018年)

応募総数 416点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】檜皮一彦《hiwadrome: type ZERO spec3》
【岡本敏子賞】風間天心《Funetasia》
【特別賞】國久真有《BPM》、武内カズノリ《こちふかば(ポッチ・川崎にて)》、田島大介《無限之超大国》
【入選者】Art unit HUST《遠山伸吾、白木英之》、秋山佳奈子、赤穂進、イガわ淑恵、井口雄介、大槌秀樹、岡野茜、革命アイドル暴走ちゃん、梶谷令、佐野友紀、塩見亮介、瀧川真紀子、田中義樹、服部正志、藤原史江、本堀雄二、馬嘉豪、宮内裕賢、宮田彩加、吉田純乃

第23回 岡本太郎現代芸術賞展(2019年)

応募総数 452点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】野々上聡人《ラブレター》
【岡本敏子賞】根本裕子《野良犬》
【特別賞】澤井昌平《風景》、藤原千也《太陽のふね》、本濃研太《僕らのDNAが知っている》、村上力《㊦一品洞「美術の力」》、森貴之《View Tracing》
【入選者】浅川正樹、井上直、大石早矢香、大小田万侑子、桂典子、小嶋晶、笹田晋平、佐藤圭一、そんたくズ、高島亮三、春田美咲、藤田淑子、松藤孝一、丸山喬平、水戸部春菜、村田勇気

第24回 岡本太郎現代芸術賞展(2020年)

応募総数 616点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】大西茅布《レクイコロス》
【岡本敏子賞】モリソン小林《break on through》
【特別賞】植竹雄二郎《self portrait》、牛尾篤《大漁鯖ン魚》、小野環《再編街》、唐仁原希《虹のふもとは宝物があるの》、浮遊亭骨牌《浮遊亭κοιλια》
【入選者】東弘一郎、AYUMI ADACHI、裏方州、太田琴乃、かえるかわる子、加藤立、金子朋樹、黒木重雄、さとうみ子、許寧、園部恵永子、ながさわたかひろ、西野壮平、原田愛子、藤田朋一、みなみりょうへい、山崎良大

第25回 岡本太郎現代芸術賞(2021年)

応募総数 578点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【岡本太郎賞】吉元れい花《The thread is Eros, it's love!》
【岡本敏子賞】三塚新司《Slapstick》
【特別賞】伊藤千史《書店レジ前の平台》、硬軟+stenoographers《速記美術のエLEMENT》、藤森哲《往日後来園》、村上力《異形の森》
【入選者】青山夢、井下紗希、因幡都頼、岡田杏里、岡田智貴、角文平、GengoRaw(石橋友也+新倉健人)、平良志季、高田茉依、張安迪、津川奈菜、出店久夫、中澤瑞季、野々上聡人、堀川すなお、森下進士、Yoko-Bon、与那覇俊

第26回 岡本太郎現代芸術賞(2022年)

応募総数 595点
会場 川崎市岡本太郎美術館
【特別賞】足立篤史《OHKA》、澤井昌平《風景》、関本幸治《1980年のアイドルのノーパン始球式》、レモコ・レイコ《君の待つところへ》
【入選者】池田はなえ、牛尾篤、大洲大作、奥野宏、空箱二郎、川上一彦、川端健太、柴田英昭、高田哲男、千原真実、都築崇広、ながさわたかひろ、西除闇、NISHINO HARUKA、平向功一、Hexagon artist*、宮本佳美、山田愛、山田優アントニ



第27回 岡本太郎現代芸術賞展

会期=2024年(令和6)年2月17日(土)~4月14日(日)

主催=川崎市岡本太郎美術館

公益財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団



川崎市 岡本太郎美術館

Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki

〒214-0032 川崎市多摩区枳形7-1-5 生田緑地内

TEL:044-900-9898 <https://www.taromuseum.jp>

編集 川崎市岡本太郎美術館
展覧会担当 喜多春月、千村曜子、澤田愛理
撮影 高木薫、榊原陽子
デザイン 辻恵里子
制作・印刷 ニューカラー写真印刷株式会社

2024(令和6)年2月発行

©Taro Okamoto Museum of Art, Kawasaki 2024

